目　次

はしがき v

第 I 部　基調論文

第 1 章
形容詞連用形を伴う日本語認識動詞構文 ..... 竹沢幸一　3

第 II 部　アスペクトと統語・意味

第 2 章
「ている」進行文の統語構造と数量副詞の解釈について
..... 松岡幹就　25

第 3 章
「てある」文にみられる方言間差異 ..... 島田雅晴・長野明子　45

第 4 章
経験相を表すテイル文と属性叙述
―叙述類型論における記述と理論の融合に向けて― ..... 鈴木彩香　65

第 III 部　テンスと統語・意味

第 5 章
素性継承システムのパラメータ化と日本語における定形節のフェイズ性
..... 三上　傑　87

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第 6 章
叙想的テンスの意味と統語……三好伸芳　107

第 IV 部　コントロール構文と統語・意味

第 7 章
いわゆる定形コントロール構文の節構造とその成立要因
……阿久澤弘陽　129

第 8 章
日本語における後方コントロール現象……王　丹丹　149

第 V 部　格と統語・意味

第 9 章
ナガラ節内における主格の認可について……石田　尊　171

第 10 章
対格目的語数量詞句の作用域、特定性、格の認可について
……本間伸輔　191

第 VI 部　述語形態と統語・意味

第 11 章
否定辞から語性を考える
―3 つの「なくなる」と「足りない」―……田川拓海　213

第 12 章
通言語的観点からみた日韓両言語における否定命令文……朴　江訓　229

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第 13 章
「[名詞句] なんて～ない」におけるモダリティとしての否定述部
……井戸美里　249

第 14 章
事象類型の選択と状況把握
―テンス・アスペクトおよび自他動詞―……佐藤琢三　267

執筆者紹介……287

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

はしがき

2017 年 3 月 27 日、編者の一人である竹沢の還暦を機に、筑波大学東京キャンパスにおいて、言語学ワークショップ『日本語統語論研究の広がり—理論と記述の相互関係—』が開催された。このワークショップでは、竹沢による生成統語論の理論的展開と日本語の格現象に関する講演が行われた後、日本語統語論における 4 件の研究発表が行われた。このワークショップは、その題名の通り日本語統語論をテーマとしたものであるが、それと合わせて副題にあるように、言語研究における事実観察すなわち記述と理論構築との往還に焦点を当てることもねらいとしていた。

本書は、このワークショップの発展形として企画されたものである。ワークショップのテーマでもある、日本語統語論研究および記述と理論の往還を柱とし、竹沢が長きに渡って研究してきた日本語の述語および述語周辺部の事象に関する論集を作るべく構想を練った。述語周辺部の事象とは、述語に関係の深いテンス・アスペクトをはじめ、格、否定、定形性、節構造など広く述語周辺部にあると考えられる形式およびその意味を念頭に置いている。

執筆陣は、竹沢の研究フィールドである生成統語論および日本語学の研究に携わる国内外の若手・中堅研究者を中心に計 15 名から構成されている。生成統語論に依拠した論考が半数程度を占めるが、いずれの論考も記述面を重視したものであるため、生成統語論の背景知識があまりない読者も、大きな困難を伴うことなく読むことができるものと思う。

各章の概要は以下の通りである。

第 I 部の第 1 章「形容詞連用形を伴う日本語認識動詞構文」(竹沢幸一)は、本書の基調論文として位置付けられるものである。本章では、「思える」という述語からなる認識動詞構文と「思われる」という述語からなる認識動詞構文を比較し、自発文である前者と受動文である後者の文法特性の違いを明確に浮かび上がらせている。ある理論を前提として演繹的に議論を進める通常の理論言語学のやり方とはあえて逆の方策をとることで、生成言語学になじみがない研究者との対話を可能にし、また、言語研究において理論と記

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

述の関係はどうあるべきなのかを問うている。このような観点から、格、述語の意味、節構造といった（日本語）生成統語論研究の古くて新しい問題に取り組んでいる竹沢論文は、まさしく本書の基調論文であり、読者には本章から読み始めることをおすすめする。

第Ⅱ部には、日本語文法研究で広く取り上げられてきたアスペクトに関する 3 編の論考を収録した。

第 2 章「『ている』進行文の統語構造と数量副詞の解釈について」（松岡幹就）では、世界各地の言語で、進行相の文が場所格叙述文の統語構造を持つという事実を背景に、日本語の「ている」進行形の文も、主語が有生名詞の場合には、当該構造を持ち得ると論じる。すなわち、「いる」が存在動詞として現れ、その項として主語名詞句と音形のない後置詞を主要部とする後置詞句を選択する。その後置詞句内には、名詞化された節が現れ、その主語が「いる」の主語によってコントロールされるという二重節構造を成す。これに対して、無生名詞を主語とする「ている」進行文においては、「いる」が相を表す機能範疇として現れる単一節構造が形成されると主張する。

第 3 章「『てある』文にみられる方言間差異」（島田雅晴・長野明子）は、東京方言の「てある」文と福岡方言の「てある」文を比較して、その相違点を記述し、理論的に説明することを試みている。まず、東京方言では完了の解釈しかない「てある」文が、福岡方言では完了に加え、進行の解釈があるということを観察し、福岡方言の「てある」文に見られる数々の特徴を記述している。そして、本書第 2 章の「ている」進行文の分析に基づいて、福岡方言の「てある」文に観察される進行読みは「ている」進行文をもとにしたものであり、また、完了読みも「ている」進行文と平行的な構造に由来すると主張している。さらに、東京方言との違いは形態的な外在化の違いに帰せられるものとしている。

第 4 章「経験相を表すテイル文と属性叙述―叙述類型論における記述と理論の融合に向けて―」（鈴木彩香）は、「太郎は二十歳になる前に、お酒を飲んでいる」という経験を表すテイル文を扱っている。特に、進行相を表すテイルは stage-level predicate、経験相を表すテイルは individual-level predicate とする理論的な先行研究に注目し、さらに観察を深め、記述の精

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

度を高めている。そして、経験相のテイルからなる文もテンスと相関関係を持てること、主語に中立叙述の解釈が可能であることを指摘し、経験相のテイルにも進行相のテイルと同様に stage-level predicate としての性質があると結論付けている。記述研究の知見と理論研究の観点を融合して、さらに発展的な分析を模索する事例研究となっている。

第Ⅲ部は、アスペクトと並ぶ日本語研究の重要テーマであるテンスや定形性に関する論考から成る。

第 5 章「素性継承システムのパラメータ化と日本語における定形節のフェイズ性」（三上傑）は、生成統語論の理論的課題に対し、日本語の関連事象の注意深い記述によって答えを与えるというスタイルの論考である。英語では定形節境界を越えた A 移動が不可能であるのに対し、日本語にはそのような制約が見られないことから、英語では定形節が常にフェイズを形成するのに対し、日本語では必ずしもそうではないと考えられている。本章は、収束性に基づいてフェイズを定式化することにより、この日英語間の違いが、フェイズ主要部である C から T へ継承される素性のタイプの違い、すなわち、Phi 素性か焦点素性かというパラメータに帰せられると主張する。さらに、本章で提案される分析は、日本語に A 移動タイプの長距離スクランブリングが存在することを正しく予測することを論じている。

第 6 章「叙想的テンスの意味と統語」（三好伸芳）は、主に主節での用法が議論されてきた日本語の叙想的テンス（ムードの「タ」）が従属節に現れた場合を取り上げ、叙想的テンスの意味的特徴と統語的な位置づけを考察している。叙想的テンスは「帰った、帰った」のような〈要求の「タ」〉を除けば従属節にも現れ得ること、〈発見の「タ」〉や〈想起の「タ」〉では主節述語のタイプとも連動した意味的制約が存在することを明らかにし、そうした制約が見られない〈仮想の「タ」〉についてもその理由を明確にする。また、〈要求の「タ」〉以外の叙想的テンスは南の四段階（南 1974）における B 類節にも生起することを示し、通常のテンスの「タ」との統語的な差異について考察している。

第Ⅳ部は、述語がとる補文に関わる事象、とりわけコントロールを扱った論考から成る。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第 7 章「いわゆる定形コントロール構文の節構造とその成立要因」（阿久澤弘陽）は、「つもり／気」が補文をとる 2 種類の構文を分析し、その統語的・意味的成立条件を明らかにするものである。阿久澤は、「つもり／気」が定形節を補文として選択する構文があり、これが定形コントロール構文であることを統語的観点から論ずる。さらに、この構文の成立要件として、de se 態度と責任関係の 2 つの語彙意味論的要因を指摘する。「つもり／気」から成る構文の統語的・意味的な記述を丁寧に行うことによって、定形コントロールに対する新たな視点を提供する試みである。

第 8 章「日本語における後方コントロール現象」（王丹丹）は、日本語において「許す」「命じる」などの述語によって導かれるコントロール文に対する詳細な記述を基盤にした意味論的・統語論的な分析を提案するものである。

（1）a.　父親は　彼女に／が　数学の授業を聞くことを許した
　　b.　信長は　利家に／が　前田家の当主となることを命じた

王は、（1a, b）に示すようにこれらの述語のコントロール補文においてニ格とガ格の交替があること、ニ格の場合は前方コントロール、ガ格の場合は後方コントロールの構造になっていることを実例も用いながら明らかにしている。さらに、この現象に対しては意味的コントロールとスクランブリングを用いた分析が妥当であることを示している。

第 V 部は、述語のとる項が持つ格に関わる現象を論じた論考から成る。

第 9 章「ナガラ節内における主格の認可について」（石田尊）は、日本語のナガラ節内部で主格認可が起こる条件を記述し、ナガラ節内での格認可に関するモデルを提示している。ナガラ節については付帯状況（継続）ナガラ節、逆接ナガラ節の他に等位接続的ナガラ節を下位分類として立て、逆接ナガラ節のみが主節事態と独立した時間指示を持つと主張している。等位接続的ナガラ節を除くと、ナガラ節内で主格認可が起こるのはこの逆接ナガラ節の場合であり、かつその中でも非対格動詞や存在文の無生内項、および所有文の内項にのみ主格認可が起こることを指摘した上で、形態的に時制要素が現れないナガラ節の屈折要素に時間指示の有無を想定することを前提とした格認可のモデルを提案している。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第 10 章「対格目的語数量詞句の作用域、特定性、格の認可について」（本間伸輔）は、対格目的語数量詞句のとる「3 人の容疑者を」、「容疑者を 3 人」、「3 人容疑者を」の各形式の作用域特性、および格と特定性についての論考である。対格目的語が否定や付加詞に対して広い作用域をとるには、特定的な解釈が必要であり、対格格助詞と特定性の両方の統語素性の認可によって広い作用域が可能になると分析する。さらに、この分析によって他言語における対格の具現、特定性、移動可能性の関連性も捉えられることを示す。日本語数量詞句の作用域に関する新たな事実の指摘に加え、格標示と移動可能性との関連性や、他言語の関連現象をも射程に入れた興味深い分析である。

第Ⅵ部は、否定形など述語がとる形態に関する論考を収録した。

第 11 章「否定辞から語性を考える―3 つの『なくなる』と『足りない』―」（田川拓海）は、「なくなる」と「足りない」という 2 つの形態を取り上げ、それぞれの語性に関する統語的特徴と形態的特徴のずれを論じたものである。

(2) a. お金がなくなった
　　b. 鰺が高くなくなった
　　c. 太郎は走らなくなった

(2) にあるように、「なくなる」は存在述語、形容詞述語、動詞述語と対応したものがあるが、アクセントなど複数の言語現象から (2a) が最も語としてのまとまりが強く、(2b) が最も弱いことを明らかにし、形態操作による分析を提案している。また、否定極性項目が共起できない現象などから、「足りない」に含まれる「ない」が統語的に機能していないことを示している。

第 12 章「通言語的観点からみた日韓両言語における否定命令文」（朴江訓）は、日本語と韓国語の否定命令文に現れる否定命令形式「-な」「ma」の相違点を考察の対象としており、「-な」と「ma」に否定極性項目（NPI）の認可および分布の自由性に関する異なりがあることを指摘した上で、両形式の歴史的変遷過程を検討していく。否定辞を源流とすると考えられる「-な」は「否定循環 (negative cycle)」に合致した変遷過程をたどり、否定命令形

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

式として定着しているのに対し、「中止」を表す動詞の命令形にさかのぼる「ma」は否定循環に従わないことを明らかにし、こうした歴史的変遷や文法化に関する経緯の異なりを「-な」と「ma」の異なりに関連づけている。

第 13 章「『[名詞句] なんて～ない』におけるモダリティとしての否定述部」(井戸美里) は、「幽霊なんていない」のような例に見られる「[名詞句] なんて～ない」という表現における否定述部の特徴を記述している。そこに現れる「ない」は、単純な否定形式でありながら、話者の判断を表すモダリティとしての外部否定を表すと主張する。また、「なんて」は、とりたて詞や補文標識として、それが付加した命題について話者が偽だと信じていることを表明する文に現れることを論じている。これらの観察を通じて、単純な否定形式にも、内部否定を表すものと外部否定を表すものという、2 つの語彙項目を認める必要があるという結論を導いている。

第 14 章「事象類型の選択と状況把握―テンス・アスペクトおよび自他動詞―」(佐藤琢三) は、ある事態に対して複数の言語表現が選択可能である場合に、その選択に事態の把握の有無や方法がどのように関係しているのかを論じたものである。

(3) a.　お客さんが　いる／来ている／来た
　　b.　お茶　が入った／を入れた　よ

具体的には、(3a) に示されるように存在表現／テイル／タのいずれが選択されるのか、(3b) に示されるように自他のいずれが選択されるのかという 2 つの問題を取り上げ、詳細な記述を元に、前者には話者がその場の状況や背景事情が理解可能かどうか、後者には事態を没入的に描くか鳥瞰的に描くかという要因が重要であることを明らかにしている。

以上のように、生成統語論を始めとする特定の言語理論への依拠の度合いは異なるものの、各章とも日本語の述語および述語周辺の事象について、事実観察すなわち記述を重視しながら言語理論の構築に寄与することを試みた論考からなっている。読者は、日本語の述語および述語関連の事象に関する研究動向を知ることができるのみならず、言語研究における記述と理論の往還の重要性を感じとれるのではないかと思う。また、それが本書の意図する

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

ところでもある。

最後に、くろしお出版の荻原典子氏には、本書の企画の段階から出版に至るまで労をお執りいただいた。心からお礼申し上げたい。

2019 年 7 月

編者一同

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第Ⅰ部

基調論文

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第 1 章

形容詞連用形を伴う日本語認識動詞構文

竹沢幸一

1. はじめに

言語形式の表面的な見かけはその背後に存在する重要な特徴を覆い隠していることがよくある。たとえば、英語の John is easy to please./John is eager to please. というミニマル・ペアは有名な例であるが、英語母語話者は、この二つの文は単に easy と eager という形容詞の表面的な対立だけにとどまらず、統語的にも意味的にも重要な違いを含んでいることを無意識のうちに知っている。そして、そうしたミニマル・ペアの発見と分析は母語話者の無意識の言語知識の解明に重要な役割を果たすこともこれまでの文法研究の歴史が示している。本章では、日本語からそうしたミニマル・ペアを一対とりあげ、そこからどのような記述的および理論的な議論が展開できるか考えてみたい。

ここで考察の対象とするのは次のようなミニマル・ペアである。

(1) a. 太郎が花子に実際より若く思われている（こと）
　　b. 太郎が花子に実際より若く思える（こと）
(2) a. 太郎が花子にこどもっぽく思われている（こと）

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第 II 部

アスペクトと統語・意味

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第2章

「ている」進行文の統語構造と数量副詞の解釈について

松岡幹就

1. はじめに

類型が異なる世界の様々な言語で、進行相の文が場所格叙述文の統語構造を持つことが知られている（Bybee et al. 1994）。（1）のような日本語の「ている」形の進行文も存在動詞の「いる」と同形の補助動詞「いる」を伴っているが、管見の限り、場所格叙述文の構造を備えている可能性について検証している先行研究は少ないと見られる。

（1）a.　太郎が　本を　読んでいる。
　　b.　風が　木の葉を　揺らしている。

本章は「ている」進行文についてこの問題を取り上げ、統語構造が異なる2つのタイプがあり、そのうちの1つは場所格叙述文そのものであると主張する。それは（2）に示すように、存在動詞としての「いる」が二重節構造を形成する場合である。

（2）a.　太郎が　本を　読んでいる。
　　b.　［太郎$_i$ が［$_{PP}$［$_{NP}$ PRO$_i$ 本を　読んで］Ø$_P$］いる$_V$］

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第3章

「てある」文にみられる方言間差異

島田雅晴・長野明子

1. はじめに

よく知られているように、存在を表す動詞は、機能的動詞、補助的動詞として相を表す形式の中に組み込まれることがある。例えば、英語の存在動詞 be は be ~ing という進行の意味を表す形式の中に生起する。また、日本語の存在動詞「いる」も「ている」という進行や完了の意味を表す形式の中に生起する。

(1) a. John is in his room. (存在)
　　b. John is playing the piano. (進行)
(2) a. ジョンは今部屋にいる。 (存在)
　　b. ジョンは今ピアノをひいている。 (進行)

この現象は通言語的に観察され、興味深い研究対象として本書松岡論文、鈴木論文も扱っている。

日本語では「いる」という存在動詞の他に「ある」という存在動詞もあり、同じく「て」を伴い、「てある」の形式で完了の意味を表す。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第4章

経験相を表すテイル文と属性叙述

―叙述類型論における記述と理論の融合に向けて―

鈴木彩香

1. はじめに

1.1 本章の背景

文の基本的な類型として、(1) に見るようなふたつのタイプが通言語的に存在するとされる。(1a) は特定の時空間に存在する事象を叙述する「事象叙述文」であり、(1b) は特定の時空間によらない恒常的な属性を叙述する「属性叙述文」である (益岡 1987)。

(1) a. 子供が元気だ。 (事象叙述文)
b. 子供は正直者だ。 (属性叙述文)

(1) のような文類型の対立は、古くから日本語の記述的研究分野で注目を集めており (佐久間 1941、三上 1953、益岡 1987、2008、2012 ほか)、ふたつの文類型の相関を論じる研究は「叙述類型論」と呼ばれ、活発な議論が行われている。

また、英語などをはじめとする他言語での理論的研究分野においても、叙述類型の対立は主要な研究トピックのひとつとなっている。特に、形式的な意味論においては、一時的な出来事・状態を表す述語 (stage-level predicate; 以下

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第 III 部

テンスと統語・意味

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第5章

素性継承システムのパラメータ化と日本語における定形節のフェイズ性

三上　傑

1.　はじめに

生成文法理論で現在採用されている Multiple Spell-out モデル（cf. Chomsky 2000、2001）において、統語構造はフェイズ単位で構築され、その都度、音声体系と意味体系へ転送されることになる。そして、その際に転送される領域については、以下の（1）に挙げられているフェイズ不可侵条件（Phase Impenetrability Condition: PIC）により、フェイズ補部と規定されている。

（1）　Phase Impenetrability Condition (PIC):
The domain of H is not accessible to operations outside HP; only H and its edge (either Specs or elements adjoined to HP) are accessible to such operations.　（Chomsky 2001: 13）

この条件に基づくと、（2）に図式化されているように、一度転送操作が適用された統語対象は、フェイズ主要部とエッジ部分を除き、その後の統語システムでの演算に関与できないということになる。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第6章

叙想的テンスの意味と統語

三好伸芳

1. はじめに

現代日本語には、一般に過去を表す形態である「タ」が過去を表さない場合があることが指摘されており、その場合の「タ」は叙想的テンス、あるいはムードの「タ」などと呼ばれている。

(1) a. あ、あった
b. 君ビール飲むんだったね？
c. ターンの失敗がなかったら21秒台は出た
d. 帰った、帰った
e. 早く帰って寝たほうがいい　　（以上、寺村 1984: 105–112[1]）

(1) の例は、いずれも命題が現在実現している事態ないし未実現事態を表しているにもかかわらず「タ」が現れている点で特殊である[2]。

これらの「タ」は、叙想的テンスやムードの「タ」といった呼称が示唆す

1 引用に際し、一部省略や表記の修正を行った。以下、同様の注記は省略する。

2 なお、このような「タ」について最初に言及したのは三上（1953: 224–227）である。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第 IV 部

コントロール構文と統語・意味

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第 7 章

いわゆる定形コントロール構文の節構造とその成立要因

阿久澤弘陽

1. はじめに

以下の（1a）は英語の不定詞補文を選択する動詞の例、（1b）は日本語の連用形補文を選択する統語的複合動詞（影山 1993）の例である。いずれにおいても、補文内の非顕在的な主語（空主語：ϕ）の解釈が必然的に主文の先行詞と同定される。

（1） a. [John$_i$ tried [$\phi_{\{i/*j\}}$ to solve the problem]][1]
　　 b. ［太郎$_i$が［$\phi_{\{i/*j\}}$ 論文を書き］直した］

このように、空主語の解釈が主文の先行詞と義務的に一致する現象は、生成文法では一般的にコントロールと呼ばれる。コントロールは、主に補文述語が時制・数・人称などで屈折しない（日本語においては時制辞が存在しない）非定形節において成立するとされてきたが、バルカン諸語（Landau 2004、

1　コントロールの分析はいくつかあり、空主語の統語的実態はそれぞれの理論によって異なる。本章では、対象とする現象の記述に特に必要でない限り、特定の理論的枠組みには依拠せず、空主語をϕで、その解釈を指標（i や j）で示すこととする。対応する指標が文内にない場合は、文外の要素を指示することを意味する。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第8章

日本語における後方コントロール現象

王　丹丹

1.　はじめに

コントロールとは、補文の空主語が主文にある顕在的要素と同一指示関係にあることを指す概念である。(1a) と (1b) は、補文の空主語 *e* がそれぞれ主文の主語 John および主文の目的語 Bill と同一指示を持っており、それぞれ主語コントロール、目的語コントロールと呼ばれている。また、主文にある顕在的要素はコントロールするものであり、コントローラー (controller) と呼ばれる。補文にある空主語はコントロールされるもので、コントローリー (controllee) と呼ばれる。(1) のように、コントロール構文においては、顕在的コントローラーがゼロ形式のコントローリーより構造的に高い位置を占めるのが一般的である。

(1)　a.　John_1 intended [e_1 to go to Paris].

　　b.　John_1 commanded Bill_2 [e_2 to go to Paris].

一方、生成文法がミニマリスト・プログラム時代に入ってから、コントロールには、(1) のように顕在的コントローラーがゼロ形式のコントローリーより高い位置を占める配列だけでなく、ゼロ形式のコントローリーが顕在的コ

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第Ⅴ部

格と統語・意味

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第9章

ナガラ節内における主格の認可について

石田　尊

1.　はじめに

現代日本語のナガラ節には、主格要素が現れ得ない（1）のような付帯状況用法（継続用法）のナガラ節（以下、付帯状況ナガラ節）と、主格要素が現れ得る（2）のような逆接用法のナガラ節（以下、逆接ナガラ節）の場合とがあることが知られている。

（1）a.　一人の女がタバコを飲みながらしゃべっていた　（南 1974: 118）[1]
　　b.　*一人の女がタバコを飲みながらこどもがしゃべっていた
　　（石田・福盛・桐越 2018: 16（2a））
（2）a.　太朗は仕事がありながら会社に来なかった　（佐藤 1997: 63（1b））
　　b.　妻子というものがありながら、彼はろくに家に帰らない
　　（石田・福盛・桐越 2018: 17（3b））

ただし、堀川（1994）が指摘するように、（3）のような場合には逆接的な解釈が現れないままに節内に主格要素が現れる。こうした例については後に

1　本章に引用する例文の表記は変更する場合がある。また、適宜下線等の追加・省略を行う。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第 10 章

対格目的語数量詞句の作用域、特定性、格の認可について

本間伸輔

1. はじめに

本章では、日本語における数量詞句（以下、QP）のうちとりわけ遊離数量詞（floating quantifier）を伴う名詞句（以下、NP-FQ）が、対格目的語（以下、目的語）として生起する場合の作用域について記述的に考察し、生成統語論の理論的見地から目的語 QP の作用域を決定する統語的仕組みを探る。1 節では、日本語の NP-FQ の作用域特性について概観し、2 節では、数量詞の持つ意味的特性である特定性（specificity）の観点から分析した Homma, Kaga, Miyagawa, Takeda and Takezawa（1992）を検討し、問題点を指摘するとともに、3 節においては、Homma et al. の一般化が彼らの指摘する事例とは異なる事例において成り立つことを指摘する。次に 4 節では、格助詞「を」の統語的な認可という観点から QP と否定の作用域関係を分析した Shibata（2015）を検討する。5 節では、特定性と格助詞の両方の認可が作用域決定に関わる統語構造上の仕組みを提案する。6 節では、この提案によって他の言語における特定性と格の認可との関わり方が捉えられることを示す。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第 VI 部

述語形態と統語・意味

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第 11 章

否定辞から語性を考える

—3 つの「なくなる」と「足りない」—

田川拓海

1. はじめに

本章では、現代日本語（共通語）において「ない」という形態が現れる 3 つの文法環境について、語性（wordhood）という観点からそれらの異同の記述的整理を行い、生成統語論および分散形態論（Distributed Morphology）による分析を試みる。具体的な目的および主張は下記の通りである。

(1) 本章の目的・主張

a. 1）（非）存在を表す形容詞「ない」、2）形容詞の否定形式であるナイ形、3）動詞の否定形式であるナイ形、のそれぞれについて、変化を表す動詞「なる」と共起させた際に現れる「なくなる」という形式の振る舞いについて記述し、それぞれ表面形は同じであるにもかかわらず異なる特徴を見せることを示す。

b. 上記の 3 つの「なくなる」は 1）語アクセント、2）とりたて詞の介在、の側面から見るとその語としてのまとまりの強さ（語性）に違いが見られる。

c. 分散形態論における形態操作を用いた分析を採用することによっ

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第 12 章

通言語的観点からみた日韓両言語における否定命令文

朴　江訓

1.　問題提起

自然言語において否定命令文は次のように普遍的に存在する。

(1) a.　［日本語］　大きい声でしゃべるな。

b.　［韓国語］　khun soli-lo malha-ci ma[1].

large sound-INS speak-COMP NEG[2]

「大きい声でしゃべるな。」

c.　［英語］　Don’t speak loudly.

d.　［フランス語］　Ne parlez pas fort.

NEG speak NEG loudly

「大きい声でしゃべるな。」

1　本章での韓国語のローマ字表記は、Samuel E. Martin による Yale 式に従っている。

2　本章で用いる略語は以下の通りである。ACC: accusative marker、CL: classifier、COMP: complementizer、DECL: declarative、DAT: dative、GEN: genitive、INS: instrument、IMP: imperative、LOC: locative、NEG: negative、NOM: nominative marker、PAST: past tense、PL: plural、PRES: present tense、TOP: topic marker。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第 13 章

「[名詞句] なんて〜ない」における モダリティとしての否定述部

井戸美里

1. はじめに

本章は、「幽霊なんていない」「冬にかき氷なんて食べない」といったときの、「[名詞句] なんて〜ない」という表現を対象とし、その否定述部の特徴を記述することを目的とする。

一見、以下の (1) と (2) は、「を」と「なんて」が異なるだけで、真理条件としては同じものであるように見える。また、否定辞「ない」はいずれも「人の目を気にする」という事態の非実現を表しているように見える。

(1)　太郎は人の目を全く気にしない。
(2)　太郎は人の目なんて全く気にしない。

しかし、実際は、(1) と (2) が表している否定は、それぞれ異なった性質を持つと考えなければ説明できない現象が観察される。本章の目的は、「なんて」が用いられた否定文とそうでない否定文を比較して、(3) を示すことである。

(3) a. 「[名詞句] なんて〜ない」という文に現れた否定は、話者の命題に

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第 14 章

事象類型の選択と状況把握[1]

―テンス・アスペクトおよび自他動詞―

佐藤琢三

1. はじめに

われわれは五感の身体的感覚を通して、身の回りで生じている事態のありようを理解する。そして、身体的経験を通して得られたわれわれの事態理解は、言語形式を通して表現される。したがって、事態のあり方を言い表す文の表現類型は、われわれの事態把握という認識作用がいかなるものであるかを語るものである。

文の叙述のあり方は、その意味的、統語的特徴と関連づけながら有意義に類型化することができる。いわゆる文の叙述の類型はさまざまに論じられてきたが、その全体像は概ね次のように示すことができるだろう[2]。

1　本章は、部分的に佐藤（2017）と内容が重なるものである。具体的には、本章の 2 節は、佐藤（2017）の一部に対して加筆と修正を施したものである。本章の 3 節の内容は本書のための書き下ろしである。また、佐藤（2017）は、竹沢幸一教授還暦記念言語学ワークショップ「日本語統語論研究の広がり―理論と記述の相互関係―」（於筑波大学東京キャンパス、2017 年 3 月 27 日）において、「日本語における〈過程〉と〈状態〉の言語化―日英対照を通して―」というタイトルで行った口頭発表の内容の基幹部分をまとめたものである。

2　（1）は益岡（1987）の論に基づきつつ、本章の立場でまとめたものである。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers